

自閉症のある人の地域生活支援 — 柏市での取り組み —

松井宏昭¹

Hiroaki Matsui¹

千葉県柏市は、全国に先駆けて自閉症のあるこどもの放課後支援の取り組みがなされた地域である。その後、市民組織である柏市発達障害者支援協議会が組織され、毎月発達障害のサポーター研修会が開催されてきている。一昨年、これらの活動を継承し、さらに発展させるため市民と協働して社会福祉法人青葉会が設立され、強度行動障害者にも対応した自閉症のある方の地域生活支援が取り組まれている。それらの柏市における取り組みを報告する。

キーワード：自閉症、強度行動障害、柏市

Keywords : Autism, Severe Behavioral Disorders, Kashiwa City

1. はじめに

筆者らが柏市自閉症協会の会員を対象に実施した調査¹により、強度行動障害や引きこもりなど非常に厳しい事態にあるご本人や家族が少なくなく、その方たちへの支援は、「待ったなし」の状態にあることが知られた。また、これまでNPO法人自閉症サポートセンター（千葉県柏市）が取り組んできた事業を通じて、二次障害への対策（手立て）が万全でなければ、いかなる自閉症支援であっても不十分だということもわかった。

さらに、2011年に実施した厚生労働省障害者総合福祉推進事業²等によって、自閉症者の2人に1人は強度行動障害を経験する可能性があり抜本的な対応が求められること、強度行動障害となった人の多くは地域から孤立し家族の献身によって家庭内で暮らす方が多いこと、そういった場合、母子密着で、過保護、外界だけでなく家族の中でも閉ざした状況にある方が少なくないこと、強度行動障害は本人だけでなく家族の負担も非常に大きく心労でダウンしたり家庭生活が崩壊してしまうことが少なくないこと、多くの市町村が発

達障害で行動障害のある人に対しては「相談支援」、「行動援護」、「療育・児童デイサービス」等の分野で精力的に取り組んでいるもののその限界のあることが明らかになった。

一方、弘済学園（神奈川県秦野市）等の実践によって、強度行動障害のある人の生活を支えて行くためには、病気の人を病院で治療するように、医療と連携した施設において、自閉症を正しく理解したプロの支援者によるきめ細かく一貫した支援を継続して受けることの有効性が証明されてきている。また、はるにれの里（札幌市）の取り組みのように、法人や事業所が支援機関となって地域のグループホームを的確にサポートすることによって、行動障害のある人が家族の暮らす街で元気に暮らしている例もよく知られている。

障害者基本法が改正され、障害者総合支援法が推進されている現在、これら強度行動障害のある人がおかれた厳しい実態と、先進的な実践の成果を踏まえて、自閉症のある人の地域生活を支援するシステムを構築し、強力に推進していく必要がある。

¹ 社会福祉法人青葉会・農博・〒277-0872 千葉県柏市十余二 175-66・04-7197-4080・04-7197-4007

2. NPO 法人自閉症サポートセンターの活動³⁾

千葉県東葛地域は全国に先駆けてレスパイトが取り組まれてきた地域である。しかし、自閉症児に対する放課後支援の取組みがなかったことから、柏市自閉症協会（当時は、柏市自閉症児者親の会）によって、2002年3月に学校、家庭に続く第三の活動の場として放課後活動クラブ「ペガサス」が開設されている。その後、2002年9月に親の会を母体とする NPO 法人自閉症サポートセンターが設立され、2003年からは制度に基づく児童デイサービス（現在、放課後等デイサービス）としてペガサスが実施されてきている。この間のペガサスの契約者数の推移を図1に示す。2002年の契約者数は25人で自閉性障害のみ。2015年のそれは108人、うち知的障害を伴う自閉性障害90人、知的障害が18人となっているなど、利用者のほとんどが自閉症の子どもたちである。

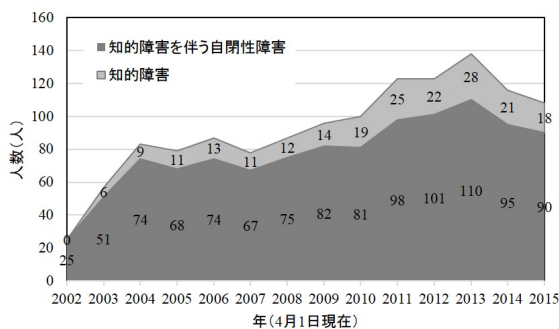


図1 ペガサスの契約者数の推移

さらに、自閉症サポートセンターでは、市民のニーズに応じて就園前や就学前の自閉症の幼児の療育事業所として「リトルペガサス」、知的障害を伴う自閉症者の作業所「生活工房こだま」、デイサービス事業所「トライアングル」、引きこもり等にあるアスペルガー症候群の人の日中支援事業所と就労移行支援事業所「being room」、相談事業所として「発達障害支援室シャル」、「ペガサス相談室」などを開設している。

これらの事業を通じてわかることは、自閉症のある人の対応では、障害の正しい理解と、一人ひとりに対応した支援が全ての基本となる一方で、

自閉症のある人は「引きこもりや、不登校、ニートなどの非社会的状況」や「反社会的な状況」、「強度行動障害」と言った二次・三次障害が一定の確率で発生することと、それらへのケアが非常に厳しい実態にあるという現実である。つまり、言いかえると、これら二次障害への対策（手立て）が万全でなければ、いかなる自閉症支援であっても不十分だということになる。

筆者は、自閉症のある人の誰もが陥りやすくかつ最も重篤な二次障害は、「強度行動障害」と考えている。

3. 強度行動障害や自閉症のある人の総合的支援

以上の経緯を経て、千葉県柏市に「社会福祉法人青葉会」が設立され（2013年8月）、アスペルガーの人から、重篤な障害のある人まで、家族が暮らす街での豊かなシティ・ライフを支援するとともに、関わる職員のやりがいを支え、ご家族のサポーターとなることを使命として、自閉症のある人の地域生活支援が推進されている。

その中核となるセンターとして、2014年4月に、強度行動障害者に対応し、自閉症のある人のための総合的な指定障害福祉サービス事業所「WITH US」が開設された。WITH US は自閉症や知的障害のある人が、家族が暮らす街で豊かなシティ・ライフを過ごすための基盤的な支援事業所として、日中活動の支援（生活介護、就労継続支援、就労移行支援）や、グループホーム・ショートステイによる夜間支援、利用されるご本人や家族のための相談支援などの総合的な福祉サービスの事業の実施を目指している。

「WITH US」がSEEDSを追及する基盤的な支援事業所を志向する中、利用者や地域の NEEDS に応えた事業グループである「自閉症サポートセンター」はリトルペガサス、ペガサス、トライアングル、生活工房こだま、being room、発達障害支援室シャルの各事業のサービスをさらに充実させるために、WITH US の開業と同時に社会福祉法人青葉会に統合され、新たな NEEDS に応えて

学齡児童の活動の場として第2ペガサス、街の中の作業の場として第2こだまを開業している。

4. 強度行動障害のある人の地域生活支援⁴⁾

WITHUS では、強度行動障害にも対応した自閉症等の人の地域生活を推進するため、将来の地域移行を目的として有期限利用の5棟からなる通過型のグループホームが運営されている。

グループホームは、コミュニティーロードをはさんで建設されている。利用者がくつろげる家庭的な場として各階にリビングを配置するとともに、2室に1ヶ所ずつトイレ・洗面を配置し、かつ利用者の動線がぶつからないよう設計されており、個人のプライベートに配慮されている。居室は、個室でそれぞれ15m²、天井も高く設計されている。リビング等の共通スペースには、WEBカメラを設置し、不慮の事故の発見に対応している。職員は、管理者、サービス管理責任者のもとに、男女別に主任を配置し、1棟を3人のスタッフが専属で担当し責任者としてホーム長を配置している。掃除、調理等は、家庭的な雰囲気を前提に寮母的に世話人を配置している。また、個々のグループホームの夜間支援をサポートするスタッフとして、法人の他の事業所から応援体制を組んでいる。

以下に、1年を経過したグループホームの様子を示す。

(1) 利用者の変化と生活の展開

グループホームの利用者は、21歳から58歳までの男性20人、女性9人。4割近くの方が入居前は強度行動障害があったが、行動障害の頻度は著しく減ってきている(図2)。

利用者は、少しずつ個のすごしだけでなく仲間と一緒に過ごす時間が増えてきている。また、最近では、これまでは職員の間でしか会話がなかった方の中で、利用者同士で会話している方も見られている。食卓を利用者全員で囲む、リビングのTVを譲り合う、全員で外出するなど家族らしさが増えてきている。他の利用者を意識して、衣類整

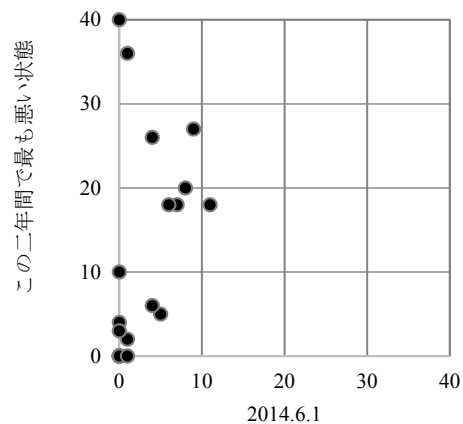


図2 強度行動障害判定指針に基づく得点の変化 (n=24)

理や歯磨きなど自分で頑張ろうという意識が芽生え始めている方も見られる。

棟によっては、最初は、食事の支度から提供までを職員が行っていたが、現在はほとんどの利用者が自分で冷蔵庫から食事を持ってきて、電子レンジで温めごはんやみそ汁をよそうことができているところも見られる。

生活の展開については、棟ごとにお茶会を開いたり、イベントなども始めるなど、個を軸に展開しながらもみんなで楽しめる物が模索されてきている。また、棟ごとに役割活動を取り入れており、利用者自身の生活参加のやる気につながっている。グループホーム全体で取り組む共通したプログラムも企画されており、共通した土曜活動の関わりの中で他の棟の利用者と関わりたいと希望される利用者が見られるようになっている。

棟によっては、継続して曜日ごとにプログラムを設定し、参加の有無は利用者自身に選んで進めているところがある。その棟では、ホームミーティングを通して利用者同士で話し合い、休日などのプログラムが決められている。利用者は、生活の中で個の過ごしと集団での過ごしを選ぶことができ、グループホームでのプログラムに興味を持ったり、楽しみにしている利用者が増えてきている。最近では、男性棟であっても家庭のように自然に女性との関わりがあってもよいとの意見が職員、家族ともに多い。

(2) 家庭（帰省）

土日の帰省が生活の流れの一部になっている利用者が多い。課題として、グループホームにおいて自立を考えた週末の余暇支援を行う機会が少ないこと、毎回日曜日に帰省されている利用者や、まだグループホームでの生活を基盤として移すことを受け入れられない利用者、家族がいることなどがあげられる。

以上、強度行動障害のある人であっても多くの方がグループホームで安定して生活できてきており、WITHUS が実施してきた支援の確かさを証明している。次のステップとして、利用者やご家族とよく話し合っ、ご家族の住まれている地域で安定して生活を送ることを目的とした、本人の強みを生かした生活目標を立て、丁寧に支援を組み立てることになる。グループホーム職員の支援を補うものとして、ヘルパーの導入といった支援のアロケーションや、余暇支援事業所とのコラボレーションといった支援の連携が鍵を握ることになると考えている。

5. おわりに

千葉県柏市（人口 41 万人）では、2002 年 9 月から柏市自閉症児者親の会が主催する自閉症サポーター研修会が始まり、それを引き継ぐ形で 2005 年 4 月に、発達障害のある人の支援者を対象とした研修と発達障害のある人への正しい理解啓発、関係者・支援者間のネットワークづくりを目的とする柏市発達障害者支援協議会が自主的に設立されている。協議会の運営は、家族、当事者、医師、保健師、保育士、教師、心理士、研究者など市民有志ら世話人のボランティア活動による。主な事業は自主研修会（参加費無料）の実施であり、世話人が企画し、毎月第 3 金曜日の夜に 40 人近くの市民が参加している⁵⁾。このように継続して積み重ねられてきた市民主催の研修会を介した市民の理解の広がりが、自閉症のある人たちの支援に大きな力となるだろうと考えている。

また、社会福祉法人青葉会には、法人の活動の趣旨に賛同して、いわゆるシルバー世代の 3 人の元企業戦士がこの 4 月に入社し、就労コーディネーターとして自由闊達な活動を始めている。さらに、社会福祉法人青葉会と、東京大学高齢社会総合研究機構や、一般社団法人セカンドライフファクトリー、柏市シルバー人材センターの有志による「ソーシャルビジネス研究会」がスタートしている。障害者福祉の世界での新たな起業につながったり、斬新な提案が出てくれば興味深い。ひそかに期待している。

多数の市民が筆者らの活動に直接関わることはなかなか難しいのかもしれないが、自閉症のある人の社会参加、地域参加、生活の広がりを進めていくためには、その実現の可否が市民に依拠することは言うまでもない。

引用文献

- 1) NPO 法人自閉症サポートセンター：“自閉症者のための都市型居住施設のモデル設計事業報告書－強度行動障害者にも対応した自閉症者の都市における生活支援と住まい－”、平成 21 年度独立行政法人福祉医療機構事業 (2010)
- 2) NPO 法人自閉症サポートセンター：“発達障害のある人の障害者自立支援法のサービス利用実態に関する調査”、平成 23 年度厚生労働省障害者総合福祉推進事業 (2012)
- 3) 松井宏昭：“自閉症者の地域生活を応援します！自閉症サポートセンターの取組み” ノーマライゼーション障害者の福祉、10月号、56-58 (2013)
- 4) 楯ほか：“強度行動障害を示す人の地域生活支援 3 -グループホームで生活支援をして 1 年-”、日本発達障害学会 (2015 発表予定)
- 5) たとえば、松井宏昭、横内郁子“柏市における発達障害者支援の取組み 2 -発達障害サポーター研修会-”、日本福祉のまちづくり学会第 11 全国大会概要集 (2008)